



川本佳苗先生インタビュー

仏教研究の情熱をおすすめ分け

仏教の開祖、釈迦の死後百年あまりのちに、仏教徒として戒律を守ることを重視した保守派から上座部仏教が生まれ、現在、スリランカやミャンマー、タイの多くの人々が上座部仏教を信仰しています。川本先生は大学卒業後、ミュージシャンとして活動していた頃に上座部仏教徒となるために単身ミャンマーにわたり、瞑想寺院での修行生活を経てさらに研究の道へ。ユニークな経歴を持ち、様々なアウトリーチ活動にも積極的にかかわる川本先生に、研究について、今後の野望についてうかがいました。

——ご研究について教えてください。

日本の仏教とは異なり、東南アジアや南アジアで信仰されている仏教は上座部仏教と呼ばれており、食事・服装・外出などの生活ルールが厳しいことで知られています。私は上座部仏教の思想や上座部仏教徒の考え方について研究しています。博士課程までは自殺・自死といった生命倫理に対する仏教観を研究していました。私は実際にミャンマーで頭を剃って尼僧として出家したこともあるのですが、新しい研究テーマとして自分が出家して

いたパオ仏教瞑想院で習った瞑想方法を選びました。二〇一八年に東南研に移ったことを機に、ミャンマーの仏教瞑想の、とくにパオ長老が提唱するパオ仏教瞑想をテーマとして研究に取り組んでいます。

これまで研究を行っていて、文献解釈のみの仏教学と現地調査を重視する人類学との間の埋まらない溝のようなものを感じていました。たとえば、仏教思想を研究していると言っても、仏教学者はサンスクリット語や漢文で書かれた仏典を翻訳し解釈することのみに専心し、同時代に生きる東南アジアや南アジア

の人々が「どのように」仏教徒として生活しているかという面にはあまり関心をもっていないかもしれません。驚くかもしれませんが、インドに行ったことのない仏教学者もたくさんいます。

他方で、人類学者は遠くの土地に飛び込んで半年とか一年間、現地の人々と一緒に生活し、コミュニケーションを通して彼らがどのように仏教徒として生きているかを理解します。けれど、サンスクリット語などの仏典が書かれた語学を習得していないという理由から、仏教思想の論拠となる仏典にはアクセスできないでいます。

だからこそ、私は仏典研究と、現代の仏教徒を知るためのフィールド調査の断絶を埋めるためにも、これらの二本柱を両立して研究していきたいと考えています。私自身も上座部仏教徒であり、尼僧として出家して修行していましたので、信仰者・実践当事者という二つの立場のバランスも取っていったらと思います。フランスの思想家のガストン・ベルジェが「どんな人であっても人は必ず一つの宗教に帰依しなければならない。しかしその一つを選んだのは、他の宗教より優れているという理由からではない」と言っています。宗教者としては、私は仏教を選んだだけ



尼僧スナندا時代の私。午後からの食事、メイク、歌やダンスをしてはいけないという戒律を守っていました。

ど、だからといってキリスト教徒やイスラーム教徒の信仰のあり方を軽蔑してはいけな
いと思っています。

研究面では、上座部仏教の僧たちは、自
分たちの仏教こそがもつともブッダの思想を伝
えていると自負するし、瞑想法の指導者たち
もです。けれど、二五〇〇年前に生まれたブッ
ダが実際に何を説いていたかを確かめること
など不可能です。ですので上座部仏教の僧た
ちが自分たちの仏教こそが正統と主張するこ

とは間違っているのですけど、ただ間違っ
ていると批判するのではなく、なぜそう考
えるようになったのかという経緯を、歴史や実践
者たちの体験を通じて紐解いていきたいです。
——研究の道に進むきっかけや、今の研究
に至った経緯について教えてください。

実は、私は研究者になる前はミュージシャ
ンでした。大学では仏教を専攻してしま
いが、卒業後は音楽講師として働き、国内外で
コンサートをしたりラジオや映像作品に出演
していました。でも、ある日、書店で上座部
仏教の本を手にとったとき「ああ、自分は
大学で仏教を学んでいたのに、気づいたらずい
ぶん遠くに来てしまった。また仏教を学びた
いな」と関心が再燃したのです。

上座部仏教の教えや瞑想法はシンプルかつ
段階的で、禅や密教のような抽象的な難解さ
がありませんでした。分かりやすくごん
どのめり込むうちに、仏教を「週末の余暇」
のように位置づける日々に満足できなくて、
二四時間三六五日々ずっと仏教に浸かる生活
つまり仏道を歩みたいと思うようになりまし
た。

そんなとき、奇遇にもミャンマーの仏教大
学の存在を教えてもらい、受験して無事に入
学したのが二〇〇八年七月でした。三年間勉
強して学部を卒業するのですが、当初は研究
者になりたいという動機はミミリもなくて、
ただ「善い人になりたい」という思いだけで
した。ミャンマーの学部三年目のとき、タイ
の国連主催のウェーサクという仏教の祭典か
つ国際学会に、たまたま論文を応募したら採
用され発表することになりました。でも実は、
仲良しのミャンマー人尼僧さんが一度も外国
に行ったことがないので、同行させて連れて
行ってあげたいなという動機からでした。

その学会で初めて「仏教と自殺」という研
究論文を発表しました。予想以上にフィード
バックをいただき、学会会場であつたマハ
チュラロンコンというこれまたタイの国立仏
教大学があるのですが、その大学院の修士課
程に進学することもその場で決まっていまし
ました。それで三週間後にはタイに引っ越し
ました。

——研究で出会った印象的なひと、もの、場
所について、エピソードを教えてください。



白いブラウスと茶色のロンジー、ショールを身につける女性修行者

恥ずかしいのですが、私は何の予備知識もなく一言もミャンマー語を話せない状態でミャンマーに渡りました。「どうもありがとう」(チューズーティンバーデー)すら長すぎるので、後半の「ティンバーデー」だけを覚えて、最初の三ヶ月間はスパーでおつりを受け取ったときやタクシーから降りるときに、元気よく「ティンバーデー!」と返していました。

——特に影響を受けたものや本を教えてください。

研究者になってからは本を参考文献として読んでしまうので、心から感動することが少なくなることが残念です。なので無人島に持って行きたいような本は、若い頃に読んだものばかりかもしれません。振付家・演出家のモリス・ベジャールは『他者の人生の中の一瞬²』と『誰の人生か?』の二冊の自伝を著していて、どちらもボロボロになるまで読み返しました。自身の心の中でうごめく感情やイメージの連鎖から作品ができていく過程は、今自分が身を置いている学術研究とはまさに正反対のアプローチなのです。けれ

ミャンマーに留学して三年目に、そんな笑い話を知り合いのミャンマー人男性に伝えたら『ティンバーデー』だけだと違う意味になるよ』と含みのある笑いを返されたのでイヤな予感がして、帰宅後、おそろおそろの辞書で調べると……「妊娠している」という意味だったんです! 私はそんなことを町中のあちこちで叫んでいたのかと思うと、もう恥ずかしくて穴があったら入りたかったです!



2019年8月、バオ仏教瞑想法の創始者バオ長老について対面できました! 貴重なツーショット。

ど、だからこそ、違う刺激を受けることが大切だと思っています。

映画なら溝口健二が好きです。日本の古典映画の黄金期の監督としては、小津安二郎や黒澤明の方が世界的に有名かもしれませんが、私は京都人のせい(か?)、溝口の雅で美しい世界観が好きです。『雨月物語』や『祇園の姉妹』は何度も観ました。ハリウッド映画にはない繊細さや情緒を感じることができま



——理想の研究者像を教えてくださいいただけますか。

研究対象に対して、感情を交えずに冷静に分析対象とだけ見る研究者もいらっしやいます。それを否定しませんが、私の研究対象はミャンマー人の瞑想者たちや、自殺防止活動に取り組む僧や彼らに自殺相談をした人たちです。生きている人が相手ですので、愛情と尊敬をもって彼らを見つめていたいです。そういう眼差しの温かさが著作を通して生き生き伝わる研究者は、宗教学者のジャスティン・マクダニエル⁴です。

あと、現在所属している東南アジア地域研究研究所の速水洋子先生も、あんなに多忙なのに自分の学生や研究所のスタッフへの優しい気遣いを怠らず、かつ常に冷静でいらっしゃるので、敬愛と畏怖の念をもたずにいられます⁵。また、研究テーマに対してワクワクする気持ちを失わないように、自分の情熱を読む人にもおすそ分けできるような論文や本を書ける研究者でありたいです。

——研究の成果を論文や本にまとめるまでの苦労や工夫をお聞かせください。

小説や詩などの文学と違って、研究論文は読み手に解釈をゆだねることはできません。読者が誤読しないように、自分の論旨に最も適切かつ正確な文章を書くことは一番苦労するところです。ぴったりの表現を探す作業は、宝石を見つけるためにどんよりした水の中を潜っているような気持ちになります。

——調査や執筆のおとも、マストギア、なくてはならないものについて教えてください。

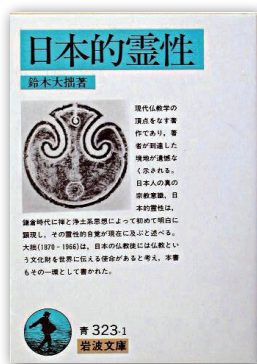
私がミャンマーに行くときは瞑想センターと一緒に瞑想修行します。ミャンマーでは女性修行者は白いブラウスと茶色のロンジー（巻きスカート）とショールを着けます。この三点セット（三種の神器）がマストギアです！ちなみに修行中は八戒の戒律を守るため、化粧はできません。なので私の写真は完全スッピンで眉毛も半分しかありませんけど、笑わないでください！



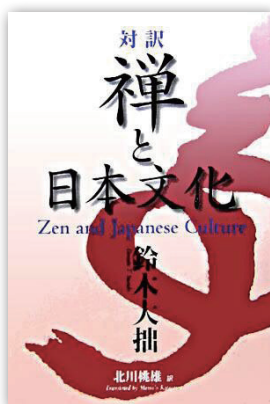
2018年8月、ミャンマーのピンウールウィンにあるバオ瞑想センターにて。ミャンマーの女性が瞑想修行するときと同じ服装の、白いブラウス・茶色のショール・茶色のロンジー（巻きスカート）で揃えています！

——若者におすすめの本についてコメントをいただけますか。

現代の日本人は、若いときから欧米の文化がスタンダード、もっと言えばクールだと思って育ちます。日本の伝統文化や伝統宗教にも関心が薄く、関心を持つことはクールで

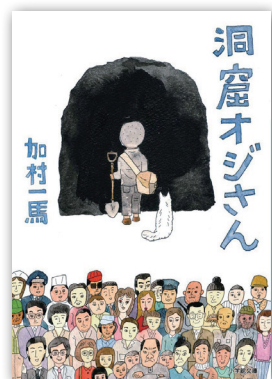


鈴木大拙著、篠田英雄校訂『日本の霊性』（岩波文庫、1972年）



鈴木大拙著、北川桃雄訳『禅と日本文化：対訳』（講談社インターナショナル、2005年）

はないと思っていますかもしれない。でも、私は鈴木大拙の著書や溝口健二、小津安二郎の映画に触れたとき、日本の素晴らしさを知ることができましたし、日本人であることを初めて誇りに思えました。鈴木大拙の本はどれもお薦めですが、入門書として『禅と日本文化』と『日本の霊性』の二冊を紹介します。最近読んで面白かった本としては、加村一馬著『洞窟オジさん』があります。一三歳で家出して四三年間、洞窟や山の中でサバイバ



加村一馬著『洞窟オジさん』（小学館文庫、2015年）

ル生活を続けた加村さんの体験記です。最初の二年間ほどは愛犬シロと暮らしていたのですが、シロが死んでしまったことで、山を下りる決心をします。年をとって文明社会に戻った加村さんですが、「おれはさ、寒さ、暑さは慣れているし、腹が減るのは我慢ができる。けども寂しさだけはいつまでもまとわりついてくることを身をもって知っている。だからシロが死んだときの寂しさ、そしてひとりぼっちになってしまいう寂しさはもう二度と味わいたくない……」と回想する台詞が胸に突き刺さりました。

人間が生きる以上、誰かとの温かいつながりは不可欠なのだと思えます。私は長年、日本の自殺問題を研究していますが、貧しさなどの経済的な問題は自殺の第一理由ではないことが分かります。仕事もマイホームも車もあり家族もいるのに自殺する人がいるから

です。誰も自分を理解してくれない、自分の話を聞いてくれないという「孤独」こそが人に生きる意味を失わせる元凶であることが分かります。

——これから研究者になろうとする人にひとことお願いします。

冷静な頭脳と熱いハートの両方を兼ね備えた研究者になってください！そして、失敗することや痛い思いをすることを怖がらないでいただきたいです。失敗から新しい発見が生まれることは多々あります。だから後から振り返ると「あの時あの経験をしておいてよかった」と思える日がやってきます。自分にも他人にもセカンドチャンスを与えてあげてくださいね。

——これからの野望をお聞かせください。

速水先生にも薦められたのですが、私の仏教観を大成した「川本仏教」を完成することです！でも、これは大きすぎる野望なので、現実的に数年以内に実現したい野望は、これまでの「仏教と自殺」と、現在進行中の



コロナ禍でも楽しく健康に過ごすためにボクシングを始めました。今年は試合出場を目指します！

「ミャンマーのパオ仏教瞑想」の研究成果を本として出版することです。この二つだけは自分しかできないし、この二つの成果を書籍化できたら、もう人生に思い残すことはないと思っています。本気。

(二〇二一年二月一〇日)

注

1 パオ（バーアウツ）長老は一九三四年ミャンマー北西部エーヤワデー地域に生まれる。正式な出家名はウー・アーチンナであったが、一九八一年にパオ瞑想寺院の二代目住職に着任して以降、パオ長老と呼ばれる。海外に積極的な瞑想指導を続け、日本にも来日したことがある。現在、本山のモラミヤインには国内外から約一千人が修行している。

2 モーリス・ベジャール、前田允訳『他者の人生の中での一瞬』劇書房、一九八二年。

3 モーリス・ベジャール、前田允訳『誰の人生か？』劇書房、一九九九年。

4 おすすめの著作として、以下があります。Justin Thomas McDaniel, *The Lovelorn Ghost and the Magical Monk: Practicing Buddhism in Modern Thailand* (恋煩いの幽霊と魔術的な高僧——現代タイの仏教実践), Columbia University Press, 2011.

5 速水先生の著作の中でおすすめしたいのはこちら。速水洋子「仏塔建立と聖者のカリスマ——タイ・ミャンマー国境域における宗教運動」『東南アジア研究』五三巻一号、六八—九九頁、二〇一五年。
https://doi.org/10.20495/tak.53.1_68

6 これまでに書いたものの中で一つあげるとすれば、こちらの論文をい覧ください。Kanae Kawamoto, "Love Incessantly Flows: Mae Naak, a New Asian Opera Heroine Born out of a Thai Buddhist Narrative (愛はめぐり続ける——メーナーク、タイ仏教説話から生まれたアジア人の新オペラ・ヒロイン)," *Contemporary Buddhism: An Interdisciplinary Journal*, Volume 18, Issue 2, pp. 346-363, 2017. https://researchmap.jp/KanaeKawamoto/published_papers/1860441